

# 史学史、あるいは歴史学の同時代史の観点から読む Reading from Perspectives of the History of Historical Narratives in Contemporary Japan

戸邊 秀明

TOBE HIDEAKI

東京経済大学経済学部

Tokyo Keizai University, Faculty of Economics

## キーワード

帝国主義 暴力 教育史 全体主義

## Keywords

Imperialism; Violence; History of Education; Totalitarianism

*Quadrante*, No.19, (2017), pp.61-67.

## 目次

はじめに

1. 「台湾植民地支配から見た世界史」として読む
2. 暴力の構造と主体
3. 教育史の内破、あるいは脱構築
4. 人種主義／全体主義を日本帝国史に導入する  
おわりに——20年のあいだの意味

## はじめに

890 頁余（目次・索引等すべて含む）に及ぶこの大冊について、専門外の私が、その構造に分け入って詳細に読み解くことはできない。駒込武（以下、著者と略）著『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2015年。以下、本書と略）に対して、沖縄近現代史と戦後日本史学史のあいだで七転八倒してきた私に、この場でできそうなことは何だろうか。ここでは、ここ20年あまりの日本近現代史・植民地研究の動向をふまえて、本書が達成したものの意義について、歴史学の同時代史のうちに位置づけてみたい。

なぜ20年なのか。私自身の研究歴に重なることは偶然だが、この同時代史はそれほど恣意的な区分でもない。それは、本書がさまざまな困難のなかで産み出される渦中の時間であり、同時に日本社会をはじめ世界が、20年前には予想していなか

った、というよりも予想したくなかったような変わり方を、社会構造においても、人びとの感情においても経験した時代だからである。本書は、歴史の書物ではあるけれど、そのような同時代と対峙し、そこへ向けて渾身の力で放たれた批判でもある。それに向きあうためには、台湾史や日本帝国史といった専門の観点だけではなく、（私が適任である自信はないが）まさに史学史的な読み方が求められている。

## 1. 「台湾植民地支配から見た世界史」として読む

まず、本書がどのような史学史の文脈に対して問題提起をしているのか、私なりの大雑把な見方を示したい。

本書のタイトルは、それだけで充分壮大に見える。しかし本書を読んでみると、著者の企図はより野心的かつ戦略的であり、むしろ「台湾植民地支配のあり方から世界史を見、問いただす」というのが、本書の内容にそくした表現だと感じる。瑣末に思われるだろうが、私の抱いたこのズレを、もう少し説明してみよう。

『世界史のなかの〜』というタイトルは、戦後歴史学をはじめとして、マルクス主義等を方法的支柱とする戦後日本の批判的社会科学によく見られる視点の表現である。乱暴を承知でまとめれば、世界史という普遍の光（「世界史の基本法則」なり資本の文明化作用なり）に照らした、日本の（あ



るいは非西洋世界のどこかの) 特殊性の解剖という組み合わせが、そこには込められていた。日本近現代史、とりわけ 1960 年代以来の日本帝国主義史の枠組みで言えば、マルクス主義の普遍的な発展段階規定にそくして、遅れた特殊な帝国主義日本が、その跛行性ゆえに、より野蛮な侵略を繰り返すという、普遍と特殊の配分関係が見られた<sup>1</sup>。

他方、このような経済的・軍事的な面に焦点を絞った侵略史の枠組みの部分性を批判して、1990 年代以降に登場したのが、日本帝国史の潮流であった。そこでは、他の植民地帝国との比較可能性と連関がマルチアーカイバルな手法で実証的に追求され、社会史・文化史にも裾野は広がった<sup>2</sup>。しかし、複数の言語を縦横に駆使したそれらの研究も、比較や関係を探求する単位が諸帝国や諸民族であれば、それらが帝国史を語る際の擬似普遍的な主語となり、サバルタンはここでも語れないことになる<sup>3</sup>。

日本帝国主義史、日本帝国史、方向は大きく異なり、また二者間の関係はそれを担う研究者によって隔絶したものと捉えられることもあれば、批判的な継承関係を意識したものもある。だが、いずれにしても言えるのは、これらの潮流が立論の支えとしていた「西洋 (の帝国)」や「理論」の普遍性という仮構自体が、本書ではまず批判にさらされていることである<sup>4</sup>。もっともそれは、本書の具体的な叙述総体の重みによってなされているの

だが、詳細かつ興味深い事実の連続に眼を奪われるだけでは、本書の射程がともすると地域研究や歴史研究に閉じたものに見えてしまうため、この点はあえて指摘しておきたい。

これに対して本書は、台南長老教中学校という植民地期の台湾に設立された一私立学校を拠点として、それをめぐる人びとの織りなす歴史から、一方では台湾に刻まれた複数の植民地帝国の力学の輻輳する様相を浮き彫りにし、他方では学校という近代的装置に未来を賭けたサバルタンの声と夢の領域を救い出し、それを通じて近代世界の植民地主義的な構造化の全体を問いただす。世界史や帝国史という「普遍」から「特殊」を位置づけるのではなく、「小さな場所」から、近代世界の〈普遍／特殊〉という対認識によって階層構造化された空間の一般性と、それが湛えてきたおびただしい暴力を可視化し、私たちの眼前に突き出す——本書の企ては、ごく抽象化すれば、そのように表現できるだろう。

このような構えは、日本帝国史のなかで、あるいはそれと雁行して提起された一連の植民地近代性論に通じるとともに、それに対してなされた民衆史研究の側からの批判をふまえた、著者なりの応答の仕方であると思われる<sup>5</sup>。著者なりの、という留意点がつくのは、次の理由からである。

ひとつは、著者の応答は、専門である教育史の観点から、近代社会のイデオロギー装置である教育や学校が、植民地権力と植民地諸階層とが接近戦を闘う空間であることから見えてくるものに、充分意識的であることだ。

植民地社会で教育が果たした抑圧性をふまえれば、民衆史の視点からは、学校こそ反民衆的な支配の拠点である。地域社会のエリートが立身出世や差別からの脱出をめざして近代性を内面化する場になったとしても、植民地近代性論が主張する

<sup>1</sup> 日本帝国主義史研究の歴史的意義と問題性の両方について、詳しくは板垣竜太・戸邊秀明・水谷智「日本植民地研究の回顧と展望——朝鮮史を中心に」(『社会科学』第 88 号、同志社大学人文科学研究所、2010 年)を参照されたい。もちろん西洋—普遍／東洋(非西洋)—特殊という知の分業関係そのものは、国民国家のもとで育成された近代科学全般にいえることであり、マルクス主義でさえも例外ではなかった、という意味である。

<sup>2</sup> その趨勢と広がりについては、少し前の研究史整理となるが、拙稿「ポストコロニアリズムと帝国史研究」(日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社、2008 年)を参照されたい。

<sup>3</sup> この点について、もっとも早くから警鐘を鳴らしてきたのが、ほかならぬ著者であった。参照、駒込武「『帝国史』研究の射程」(『日本史研究』第 452 号、日本史研究会、2000 年)。

<sup>4</sup> この点は、本書の重要な前提(ないし助走)として、すでに駒込武「『帝国のはざま』から考える」(『年報・日本現代史』第 10 号、現代史料出版、2005 年)で明確に対象化されていた。

<sup>5</sup> 植民地近代性論として知られる研究潮流は、東アジア史のなかでは、特に朝鮮近代史研究において 2000 年代に焦点となった。論争の展開や意義と課題については、板垣竜太「『植民地近代』をめぐって——朝鮮史研究における現状と課題」(『歴史評論』第 654 号、歴史科学協議会、2004 年)、三ツ井崇「朝鮮史研究における『植民地近代(性)』をめぐる議論の動向」(『歴史科学』第 206 号、大阪歴史科学学会、2011 年)等が参考になる。民衆史の立場からの批判は、趙景達『植民地期朝鮮の知識人と民衆——植民地近代性論批判』(有志舎、2008 年)に代表される。

ような近代性を貫徹する装置ではありえない。著者は、主に朝鮮近代史にもとづくこのような批判に充分耳を傾けるだろう。その上でなお、地域エリートや知識人が支配民族に接近すればするほど、むしろ実際の能力を認めない人種化された社会構造に直面して疎外され、民族意識を駆り立てるような、当時の植民地支配の構造が創り出した葛藤の機制から、著者は眼を逸らさない<sup>6</sup>。そこには、今日にも通じる支配の機制とダイナミズム、そしてそれらに促された主体化の苦悶が見出されるからだ。民衆史の対象そのものではないとしても、植民地主義が再生産し続けているサバルタン性の入り組んだあり方に、照準は明確に定められている<sup>7</sup>。

もうひとつは、これは私の能力から印象論に終わるが、朝鮮や中国の民衆世界の構造や意識を基準に組み立てられた民衆世界論と、台湾のそれとの差異が、本書のような植民地近代性論とその批判をふまえた応答の仕方に反映されているのではないか、という点である。従来、経済史などでは比較史的に論じられているが、民衆史・社会史の方面での突き合わせは多く今後の課題に属する。本書はそのためにも、大切な触媒となるだろう。

## 2. 暴力の構造と主体

以上のような史学史的な位置取りのもとで、本書は何を達成したのだろうか。特長を挙げればきりがなが、あえて絞れと言われれば、次のように答えたい。すなわち、本書の眼目は、近代世界とりわけ植民地空間における暴力の質と展開に即して、その空間の構造化と流動性を捉え直し、植民地近代性論の重要な争点でもあった、①人種主義（レイシズム）、②公共圏、③全体主義（ファシズ

ムや動員）の内実を再検証したことにあり、と――。

しかも、それを実現した叙述の水準において際立っているのは、理論への接近の仕方と、それを実証と往還させる方法である。本書は時系列にそって三部で構成され、各部の序と小括（いずれもそれだけで論文としての価値をもつが）において、上記の①～③が吟味される。その際、概念が提唱された地点に立ち戻った検討を経て、再定義に挑んでいる。なかでも、この三つから想像がつくように、著者はこの間、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』等を読みこみ、多くの示唆を得ながらも、台湾史の具体的な歴史にそくした吟味を通じて概念を鍛え直し、西洋／東洋や普遍／特殊といった区分の罫に陥らないよう概念の汎用性を高めてきたといえる。この点を特筆するのは、日本語で書かれた研究で、この種の試みがなされる例は極めて少ないからだ。

また本書の叙述全体において気が配られている点として、暴力と主体性のありかたをめぐる、著者が発揮する感受性の質についてもふれておきたい。植民地近代性論に対しては、都市生活や近代的諸装置など、表層的なモダニズムとそれにふれた階層を捉えて近代性の「貫徹」を過剰に強調している、との批判がある。確かにそのような批判が文字通りあてはまる著作も少なくない。ただし、植民地社会を根幹で規定する法外な暴力と、それによって作りかえられていく社会が、近代的な装置と無縁な場所にあるということにはならない。植民地支配で行使された暴力の質と、それが社会構造に組み込まれていく植民地化のあり方を問題にするには、近代的な諸装置そのものが産み出す暴力性の質を検証しなければならない。学校が分析の対象＝拠点として選ばれたのは、著者においては教育史という専門以上の意味を持つことがわかる。

だが、著者が直面した課題は、もう少し奥の深いものだろう。前述した日本帝国主義史における侵略史の叙述の型に典型的なように、植民地権力の野蛮さ、酷薄さを告発すべく侵略・動員の苛烈さを描く歴史叙述が、民衆の主体性の剥奪ないしは無力化を（叙述上の遂行的な効果として）かえって促してしまう危険性には、しばしば出くわす。

<sup>6</sup> 台湾社会の歴史的経緯をふまえて植民地近代性論を捉え直す試みとして、すでに駒込武「台湾における「植民地的近代」を考える」（『アジア遊学』第48号、勉誠出版、2003年）がある。

<sup>7</sup> なお私も、趙景達前掲書において、戦時期朝鮮の転向知識人の評価をめぐる批判を受けている。当時の現実に照らして知識人の責任に関する追及が不徹底だった点は、民衆史の立場からの当然の批判として受け入れたい。その上でなお、植民地社会の知識人が被った困難な位置と、それも含めた植民地社会における暴力の構造化という問題は、普遍的な課題として今後も探求されるべきものだろう。

「被害者」の面が前面に出れば出るほど、そのように読まれる傾向は増すだろう。

当然のことながら、民衆史やマイノリティ研究の立場からは、主体の不在が批判され、サバルタンの主体性を描き出すことが求められてきた。しかし、階級闘争史や人民闘争史が過去に陥ったように、過酷な条件を無視して主体性を読みこんでしまう危うさから、現在の研究も免れているわけではない。その結果、民衆の主体性が、たとえばマイノリティに対する暴力として発揮され、暴力を回避するための必死の選択が、民衆のあいだにいかなる亀裂を生んだのかといった議論は、後景に退きがちになる<sup>8</sup>。この問題にどう向きあえばよいだろうか。

著者は、複数の力の合力としてふるわれた暴力を丁寧によりわけて、その質を見極めること、そして暴力のなかで挙げられた声やよじれた身体の痕跡を拾い集め、そこに込められた主体の“夢”を読みとること——そのような、いわば兆候的読解を徹底させることで、この問題に応えている。同時に、そのような読解を、植民地権力を構成する現地「内地人」を中心とする重層的な社会にも向け、彼らの“欲望”を抉り出すことも忘れない（この点は後述する）。本書の叙述が産み出す植民地社会のリアリティは、そのような注意深さに支えられている。

こうしたミクロなレベルでの暴力の犀利な読解とともに、グローバルな植民地支配の連関のなかに台湾をたえず位置づけることで、構造化された暴力の広がりが見られることも本書の魅力である。しかも、世界的な「構造」の規定性を蓋然的に漫然と指摘するのではなく、具体的な人と人のネットワークを通じてそれは描き出される。

この点は、宣教師たちのネットワークが戦後の日米関係にまで流れ込み、戦後日本の「国家神道」概念を緊縛・制約した点にもっともよく現れている。この点の実証的な詰めは今後さらになされるべきだが、日本特殊性論という「神話」を、日米

二者関係の函数として捉えるばかりでなく、日米の共犯によって掻き消された戦時期国家神道の犠牲者たちから捉えかえす本書の議論は、画期的である。

たとえば、E. H. ノーマンと E. ライシャワーの二人は、宣教師の子として日本で育ち、やがて歴史家・外交官となる共通の履歴を持ちながらも、対蹠的な位置に立っていたことは、史学史の上でもよく知られている。だが、とりわけライシャワーが戦後の日本文化論や日本研究のあり方に与えた影響を考え合わせると、彼に体现される、戦前一戦時一戦後を貫いて現れる帝国の共犯関係は、たいへん根深いことがわかる。本書は、そのような文脈をふまえてこなかった、戦後日本の学問史（たとえば宗教史や教育学史）への鋭い批判ともなっている。

### 3. 教育史の内破、あるいは脱構築

次に、著者が負っているディシプリンである教育史の観点をめぐって、いくつかコメントしたい。

私自身は、歴史学における社会運動史や社会思想史の観点から、戦後沖縄における教員集団の動向を、その復帰運動に向かう思想と行動にそくして研究してきた。そのため、当然のことながら教育学の一部門として制度化されている教育史の研究知見から多くを学んできた。そのように、外側から教育史を見てきた者にとり、本書は教育史学の緻密な実証性を駆使しながらも、その実証を、従来の教育史の枠組みからはみ出したものを読みとるために積極的に用いることで、いわば教育史を脱構築、あるいは内破していく試みと読める。

それがもっともよくわかる第Ⅱ部を見ると、台南長老教中学校の設立と運営にかかわって、帝国政府の教育政策を分析することで、従来の法制史的な分析手法を再構築する過程が進行する。地域ごとに分立した教育制度史を連結したかたちにとどまっている「帝国の教育史」の現状に対して、著者は、植民地下のひとつの学校とその設立・運営主体を視座として帝国の教育法令の体系を捉え直す。ここには、教育制度史という枠組みにおける主体の反転が見られる。と同時に、帝国日本の法令の体系に一見カラー・ブラインドなかたちで書き込まれた人種主義をあぶり出していく分析も

<sup>8</sup> こうした課題に対する民衆史研究の立場からの真摯な応答のひとつとして、アジア民衆史研究会・歴史問題研究所編『日韓民衆史研究の最前線——新しい民衆史を求めて』（有志舎、2015年）の特に第Ⅲ部を意味づけることができるだろう。図式的な研究史整理に終わらない有効な対話が、ここから可能であるように思われる。

興味深い。

もちろん、このような読解を可能にした拠点が、私立のかつキリスト教系の学校であることは決定的に重要である。ここで著者は「学校史」の形式を援用しながら、この学校を拠点にすることで許された「自治的空間」、いわば対抗的な公共圏の創造を求めた台湾人の営為を浮かびあがらせる。学校制度にもとづく公共空間でありながら、戦前の、しかも植民地下の私立中学校であることに由来する階級的・文化的な親密性の醸成により、台南長老教中学校は、対抗的な公共圏を創造する拠点となった。

ここで、本書のオビにも使われている言葉、“「台湾人の学校」という夢”に込められた含意について考えておきたい。「台湾人」とは誰に対して自己を立ち上げる名乗りであるのか。帝国政府に対してはもちろんのこと、自分たちをある面では庇護してくれるミッション・スクールを取りしきっていたキリスト者たち、別の帝国から派遣された彼らからの自立も、また重要な課題だった。あらかじめ定義のはっきりした「台湾人」が抵抗の拠点作りを進めるというよりは、「われわれの学校」を作るために集う行為こそが「台湾人」という意識を獲得させ、その自覚が公共圏創出の担い手を育む、そのような展開が本書では描かれている。台湾史に疎い者はこれ以上の想像を控えなければならないだろうが、寄付者・教育者・生徒等、それぞれの関わり方は異なるにしても、ここに学校あるいは教育というものに賭けられていた期待の原像が浮かびあがる。

それをもっともよく象徴するのが、林茂生による「台湾教育史」の執筆という歴史叙述の行為である。「近代」に抑圧されるかたちで近代を迎えることになった社会にとり、それゆえにこそ求められた「教育」や「学校」は、新しい社会作りの基礎としての“「教育」という夢”の原像を写しとっている。

学校が歴史的に持つ、このような公共的機能の捉え直しは、当時の台湾における「われわれの学校」作りが有する「自治的空間」への闘いを掘り起こし、大きな物語としてある「抗日」や「自治」の諸運動をより深く捉え直すことにもつながる試みではないか。同時に本書は、学校を「公共サー

ビス」の装置とする近年の理解から、公共圏を創造する場としてあらためて捉え返す反転の道筋をも照らし出してくれる。もちろん、歴史と現状分析は別個のものだ。しかし、私たちが日常意識する教育や学校のイメージは、不断に研究主体の認識の地平を浸食しており、教育史もまたそのような日常から免れているとはいいがたい。ならば変革主体による民主化の拠点といった勇ましいものでなくとも、植民地下の学校という場が育んだ公共的機能の歴史的意味を知ることは、私たちの自明視された認識の地平を覆す重要な梃子となるだろう。

#### 4. 人種主義／全体主義を日本帝国史に導入する

最後に、第 III 部についてコメントしたい。日本（本土）史でいうところの「戦後史」を研究する者にとり、1930 年代から総力戦、そして 45 年以後の敗戦／帝国崩壊の歴史を、誰がどのような場で担い続けるのかを知ることが重要である。だが第 III 部は、私のそのような狭い関心を越えた意義を、日本近現代史に対して持つだろう。いわゆる十五年戦争期の日本（帝国）史の叙述に、人種主義や全体主義の概念＝視角をどのように有効に導入できるか、それを考えるための重要な示唆を多く与えてくれるからだ。

本書では、人種主義に着目するとき、それが被植民者の主体の「無力化」を産み出す機制に注意を払っている。人種主義が創り出すこの機制と、それがもたらす効果が、それぞれの部において「厚い記述」となって描き出されている。なかでも、神社参拝問題とそれによる排撃運動のテロルとが、帝国内のミッション・スクールを標的に連鎖していく過程を克明に跡づける第 III 部全 4 章の構成は圧巻である。

排除を駆動させるテロルの恐怖が醸成され、恐怖から人びとが孤立化＝アトム化することで、「全体」への統合・動員が容易になっていく——全体主義のそのような展開を、植民地帝国の規模で精緻に論じたことは、二つの効果を有するだろう。ひとつは、日中戦争以降の総動員帝国化とそれによる社会の構造転換に視野を集中させてきた、近年の日本史研究に対する重要な批判となっている。もうひとつは、神社参拝問題の帝国内連鎖から、

日本帝国の自滅の過程を望見する理解を（ある種黙示録のように）導き出していることである。

本書では、全体主義をどの面で捉えているのだろうか。ここでも私の印象だけで許してもらえば、それは劣位にある者を二者択一の「選択≒決定」に追いこむ権力として造形されている。この「恐怖の権力」とでもいうべき力の酷薄さは、公然・隠然の暴力それ自体によって人を痛めつけるだけでなく、それに曝されたものが、自らに対し決定を迫るように追いこむところにある。その際、「決定した」という決断にともなって現れるはずの主体性は、すでに狭められた選択肢を選ばされることでしか果たされず、大きな喪失感という主体の残骸を当の決定者に負わせる。それが外にむかつては、自らの生の拠点となっていたはずの、公共圏はおろか親密圏さえ引き裂く契機となってしまう。だが、この権力は「もういいだろう」と手を緩めることはない。むしろそこまではすべて準備段階であったかのように、関係をずたずたにされた人びとを動員に流し込む。しかもその動員を経て現れる集合的行為は、祖国や民族の“夢”につながる選択≒決定として語られる。もちろん、一等国民としての主体化を許されない植民地の人びとが、この夢に殉じることはなく、多くは面従腹背の日々を送ただろう。しかし、無力化と動員を同時に味わった人びととその社会に、この権力が刻みつけた傷はあまりに深く、「戦後」にも持ち越された。“夢”を語ることを許さない「戦後」を味わった人びとは、もちろん台湾にとどまらない。

本書から汲み取ってこのように素描した全体主義化の過程は、植民地社会における「皇民化」の内実を考える際、テロルなど事件の表層にとどまらず、社会にもたらしたダメージの大きさから理解するために不可欠の視角だろう。ただし本書の魅力をさらに高めているのは、この過程が、テロルを起こし、もしくはその勃発を示唆して恫喝に利用した在台日本人社会の動向を緻密に描く部分と組み合わせられているからである。強者に立つ、というよりは立ちたいと思う者が、その立場に達するために、「成り上がった」自身の記憶をあらかじめ否認することで、強者に立ったと思い続ける——そのような心的機制が、在台日本人社会の階層構造やジェンダー秩序のあり方を見据えて論じ

られている<sup>9</sup>。もちろん、否認は一度きりですむものではない。自身の優越感を持続させるには、社会を転覆させる（と恐れられた）「内部の敵」を炙りだし、それを排除することで、メンバーシップと忠誠心を確認し続けねばならない。第Ⅲ部の厚みのある叙述は、植民者たちのそのようなひきつった顔を描くことで、植民地で行使された全体主義の惨たらしさから、日本帝国史の従来の叙述のあり方を問いただしている。

### おわりに——20年のあいだの意味

最初に戻りたい——もう20年も前になる。当時、歴史学研究会や日本史研究会等の学会では、戦争責任研究や国民国家論の潮流にも棹さすかたちで日本植民地史の研究が盛んになりつつあった。大学院でも、植民地研究を最初から専攻する先輩が多かったのは、そのような動向の反映だったのだろう。私も沖縄近現代史を学びつつ、植民地主義を対象にする学際的な研究会に出入りしていた。そうしたなかで、著者の『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）は、帝国の構造を可視化する章立てにも現れた広壮さと、教育史を背景とした実証の緻密さ、そして東アジアからの批判の声に向きあおうとする真摯さによって、多くの若い研究者を惹きつけ、かつ勇気づけた。特に留学生たちが、この著者を敬慕すること篤い場面に何度も出くわした。

その後、著者が台湾に焦点を当てて、日本帝国史と欧米の植民地主義を串刺しにする議論を組み立てていることは、最初の単著から間をおかずに相次いで発表された論考からもうかがえた。読者の誰もが、数年で次の単著が出るだろうと期待していた。実際、本書の原型となる論文の多くは、発表されてから10年以上経過している。この著者になお、日本帝国史を組み替え、教育史を内破する難しさがあったのかもしれない。だがそれ

<sup>9</sup> ジェンダー秩序の分析に、本書の著者がどれだけ意識的であるかは議論の余地があるかも知れない。しかし、マスキュリティの過剰性などは随所に描き込まれており、植民地化された台湾において、それぞれに分断されエスニシティ化された社会のなかで、他の社会を意識しつつ、どのように家父長制が変貌し、再構築（場合によっては伝統化）されていくのかを徴候として読みとることは、読者の関心に応じて充分可能である。

以上に、日本の脱宗主国化の失敗と東アジアにおける民主化の波が閉塞していく動向とが絡まり合う暗澹たる状況に対して、日本の研究者としてどのような歴史叙述をもって応えていくかという、より切実な課題を、状況と併走しながら考え続けるという真摯な営みが、これだけの時間を著者に強いたのではないか。しかし、その困難に打ち克って、著者がこの大冊を、幾重にも難題を自覚しなければならない 2015 年という時に、時代の逆風に耐えられるように、いくつもの方法的な創意と緻密な叙述を携えて送り出してくれたことに、感謝したい。

すでに述べたように、本書は前著にも増して、さまざまな示唆と課題を、とりわけ後続の者に与える。前著は帝国史研究という領域を可視化させるアイコンのようでもあったが、本書はそのような特定の研究領域をひとつ踏み抜いたところで、歴史研究の意義と可能性について、広範囲な読者に訴える力を持っている。その喚起力に圧倒されつつも、その叙述と方法の水準で、今後しばらく、じっくりと本書から学んでいきたいと思う。この拙い読書報告は、その出発のためでもある。

【付記】本稿は、書評コロキウム当日（2016 年 3 月 17 日）のコメントを、当日配布したレジュメにもとづいて、できるだけ忠実に文章化したものである。ただし、書評としては本文がいささか抽象的になってしまったため、新たに注記をつけて参考文献等を補った。